

日韓ユース平和フォーラム

第3回／2024 年報告書



【目次】	◇はじめに	p2
	◇開会あいさつ	p3
	◇2024 フォーラムは・・・	p5
	◇2024 フォーラム要項	p8
	◇参加者名簿	p10
	◇フォーラムに参加して・・・	p11
	◇声明文 2024	p31
	◇準備会・報告会日誌	p33
	◇2024 フォーラム会計報告	p34

編集◆日韓和解と平和プラットフォーム 日本ユース作業部会

韓日和解と平和プラットフォーム 韓国ユース実行委員会

◇はじめに

2020年7月、日本と韓国の市民団体・宗教団体が結集して「日韓和解と平和プラットフォーム」が結成された。日韓プラットフォームは結成した当初から、日韓青年交流プログラムを共同の課題の一つとして掲げていた。そして2021年、3年間の事業として2022年：韓国、2023年：日本、2024年：韓国開催が合意され、日韓それぞれの事務局とユースプログラム作業部会で準備が始められた。

2022年8月22～26日、韓国のパジュとソウルを会場に、第1回日韓ユース平和フォーラムを開催した。日本側参加者は19人、韓国側参加者は20人。2023年8月29日～9月2日、東京を会場に第2回日韓ユース平和フォーラムを開催し、韓国側19人、日本側20人が参加した。

そして今年（2024年）8月26～30日、韓国・済州島を会場に第3回日韓ユース平和フォーラムを開催し、韓国側20人、日本側20人が参加した。

この3年間、韓国側も日本側も、多くの労力と時間を使ってユースフォーラムを準備し実施してきたが、なによりもフォーラムに参加した青年たち一人一人が「次の一歩」を踏み出していることが感ぜられ、私たちが最初に掲げた目的がほぼ達成できたように思う。

とくに庭野平和財団がこの3年間、経済的な面で全面的に支援してくれたことに、感謝するばかりである。

2024年11月

日韓和解と平和プラットフォーム



◇2024 日韓ユース平和フォーラム 開会あいさつ

《韓国プラットフォームあいさつ》

李娜榮（イ・ナヨン）（日韓プラットフォーム 運営委員 / 正義記憶連帯理事長）

日韓青年の皆さん、こんにちは！

私は正義の記憶連帯理事長で中央大学教授のイ・ナヨンです。諸般の事情で一緒にできなかったことをお詫び申し上げます。

濟州島の美しい自然を十分に満喫されましたか。また、濟州島の歴史にまつわる近現代史の痛みについても、大きな学びの機会となったことを願っています。先祖が犯した過ちがまだ皆さんの重荷となっている現実、残念で申し訳ない気持ちでいっぱいです。歴史を直視し、反省し、二度と過ちを繰り返さないという決意と実践が世代を超えて共鳴するとき、世の中は少しは良くなるのではないのでしょうか。そのような心がつながり、広がるとき、今回の交流会の結実が大きく花開くと思います。

世界が戦争と紛争に染まる中、朝鮮半島の緊張も高まっており、歴史の正義が後退する厳しい時期です。皆さんの健全な連帯が、東アジアの民主主義と平和を守るための大きな土台になると信じています。ぜひ、この気持ちを強く持って、日常生活に戻ってください。日韓が不幸な過去の歴史を乗り越え、より平和な世界のために、マイノリティと弱者の人権増進のために平等に手を取り合って進む日を期待し、皆様のご健勝をお祈りいたします。

*本稿は、韓国運営委員を代表して書かれたものであり、フォーラムの閉会式に代読された。

《日本プラットフォームあいさつ》

比企敦子（日韓プラットフォーム ユース作業部会／日本 NCC 教育部理事）

今年で3年目となるフォーラムへのご参加をここから歓迎いたします。

2022年はソウル・パジュで、2023年は東京で開催しました。両国で体験したフィールドワークや講演を通して、歴史の事実に向き合う経験をされたと思います。更に両国のユースが出会い、親しく語りあい、互いの思いを聴きあってきました。今年も新たな出会いと気づきが与えられますようにとこころから願っています。

今年は韓国・済州島（チェジュド）にて、日本の植民地支配下の基地跡、「チェジュ4・3」の虐殺現場を歩き、カンジョン海軍基地、セウォル号記憶館を訪問します。

これまでオンライン学習会を通して学んできた事柄を、実際に自分の目で確認することになります。歴史の事実と重さを実感なさることと思います。

2013年夏、日本キリスト教協議会（NCC）教育部は「日韓在日ティーンズキャンプ」をチェジュドにて開催し、「4・3事件」を学びました。今も残されている戦争の傷跡や痛ましい虐殺の歴史を学び、黄色い旗を掲げて海軍基地建設に反対しているカンジョン村を歩きました。工事を遅らせるための抗議をしているシスター達にも出会いました。参加者のほとんどは中学生でしたが、チェジュドが沖縄と同様の痛みを抱えていることを知りました。琉球弧の島々ではミサイル基地化が進んでいます。

2019年夏、在日大韓基督教会とNCCの合同プログラムでピョンヤンの朝鮮基督教連盟を訪問し、アジア・太平洋戦争中に日本のキリスト者が政府に同調したことを謝罪しました。世襲制の国家を良しとはしませんが、共和国の庶民は核ミサイル開発を望んではおらず、経済の発展を願っています。しかし、カンジョンや沖縄の軍備化が進み、韓・日・米軍事演習が続く限り、共和国にとっては脅威なのです。

北東アジアの歴史を学ぶ時、朝鮮半島の分断や琉球弧の歴史と切り離すことはできません。休戦状態にある朝鮮半島の平和構築の方向性を追い求める努力も求められます。日本では近現代史が十分に教えられていないのが実情です。今回、最も近い国である韓国の美しい島であるチェジュドで起きた歴史の事実を学び、平和への方向性を模索していただきたいと願っています。

最後のオンライン事前学習会レジュメに「チェジュ島民はアカを再生産し、女性はアカや暴徒を再生産すると捉えられ二重の苦痛がある」とのコメントに驚愕しました。

ユースの皆さんは、歴史認識と共に、家父長的な意識をも問う学びもとても大切です。

丁寧な配慮の元に示されたプログラムを準備して下さった韓国側スタッフの方々にここから感謝しています。皆さまのご健康と学びが守られますようお祈りします。

2024年8月26日

*本稿は、日本ユース作業部会を代表して書かれたものであり、フォーラムの開会式に代読された。

◇2024 ユース平和フォーラムは・・・

2024年8月26日から30日の4日間、韓国済州島で第3回日韓ユース平和フォーラムが開催されました。このフォーラムは、日韓のユースが交流することで互いに理解を深め、共に和解と平和構築のためにネットワークを形成していくことを目的としています。

今年は、韓国側から20名、日本側から20名の参加者が与えられて、「済州4・3事件」「セウォル号事故」「江汀村海軍基地」という国家的暴力というテーマでつながる3つのことについて、共に

学んでいきました。事前に、日本の参加者対象の学習会を2回、日韓合同の学習会を3回行なっていたからのフォーラム開催となりました。

1日目は、開会式のあと、互いのことを知り、安心して学べる共同体となるために、自己紹介やゲームを行ない、夜は、実際に体を動かしながら関係性について学ぶワークショップを行ないました。活動を通して与えられた気づきを、グループで分かち合うことによって、より深めることができました。



2日目は、済州4・3平和公園や虐殺の現場であるドトル窟や北千里を訪問しました。統一した祖国の独立を求める済州道民に対して、南に単独政権を建てようとした米軍政と李承晩らが弾圧を加えたことで起きた4・3武装蜂起ですが、平和的に解決する道もあったにもかかわらず、見せしめとして武装隊だけでなく道民に対しても徹底的な討伐が行なわれ、3万人もの人々が犠牲になりました。「赤（共産主義）の島」というレッテルを貼られた済州島の人々は、4・3について沈

黙するしかなく、そのことが、語られるようになったのは、ようやく軍事政権が終わった時でした。現在は真相究明が進められ、盧武鉉大統領による公式謝罪も行なわれましたが、いまだに4・3の歴史的認識は定まっておらず、武装隊の人々の名前は犠牲者としては刻まれていません。4・3とは何であったのか、なぜ多くの人々の命が奪われなければならなかったのか、いつか真実が明らかにされ、正しい評価が行なわれることを願わずにいられませんでした。



3日目は、10年前の2014年4月16日に沈没したセウォル号事故を記憶するセウォル号記憶館を訪れました。修学旅行で済州島に向かっていた多くの高校生が亡くなった悲惨な事故を皆さんも憶えておられるでしょう。館長さんのお話を伺い、利益を優先し本来守られるべき基準や検査がないがしろにされていたことで起きた事故であること、適切な避難誘導と救助が行なわれていれば多くの命が助かった事故であると感じました。幾つか事故の要因があげられていますが、決定的な原因は究明されていません。



館長さんから、真相が究明されるよう日本からもセウォル号事故のことをおぼえて連帯してほしいと言われました。私は当時この事故に悲しみと憤りを感じましたが、10年の間に記憶が頭の片隅に追いやられていたことに気づかされました。努力しなければ記憶が薄れることを経験し、自戒を込めてセウォル号事故の象徴であるイエローのバンドを今、腕に着けています。このような悲しいことが二度と起きないようにと、高校生によって、イエローリボンの活動が続けられています。



午後は、翌日の江汀村海軍基地訪問のために、沖縄米軍基地と江汀村海軍基地について学ぶワークショップが行なわれました。対中国という米軍の東アジア戦略の一環として強引に建設された江汀村海軍基地は、沖縄の基地問題とつながっています。どちらも人々を分断し、自然を犠牲に

しています。沖縄についての発題を、沖縄で悩み傷つきながら基地問題と向き合っている青年がされました。自分の弱さを隠すことなくフリーペーパー『うみかじ』に綴り、韓国や台湾の人たちともつながりながら活動されている姿から、学ばされました。



夜には、声明文作成のためにグループごとテーマを選んで言葉を紡ぎ、その言葉を土台に、有志

が夜中までかかって声明文の草案を作成しました。

4 日目は、江汀村を訪問しました。海軍基地は、希少なサンゴの生息する美しい海の近くの岩場に建設されていました。美しい風景の中に、有刺鉄線付きの塀で取り囲まれた基地が広大な敷地を占領していることが残念でなりませんでした。基地の近くでは、毎日 11:00 から、基地に反対



するカトリックのミサが行なわれていました。また、毎日 12:00 に行なわれる基地前のデモには、全国各地、また海外からも基地に反対する人々が集まっていて、私たちも一日だけこの活動に加えていただきました。歌とダンスによって行なわれるデモはとても新鮮でした。



夜の Farewell Party では、グループの代表がフォーラムの感想を分かち合い、声明文起草委員により声明文が発表されました。できあがった声明文

は、4 日間ともに過ごした私たち皆の言葉そのもので、声明文の最後に参加者全員の名前を記すことが同意されました。



私は今回初めて日韓ユース平和フォーラムに参加しましたが、日韓のユースが共に学び、分かち合いながら、言葉の壁を越えて関係を築いていく姿に大変感銘を受けました。国同士の関係がどうであれ、私たちは、日韓の間にある課題につい

て対話し、協力していくことができる、そう思われました。このようなフォーラムが引き続き、開催されることを願っています。

●細井留美

(引率者／日韓 PF 日本ユース作業部会)

◇2024 日韓ユース平和フォーラム 実施要項

<日韓ユース平和フォーラムの目的>

- 日韓の近現代史の現場を訪ね、その時間と空間を体験する。
- 日韓の青年たちと、日本のこと、韓国のこと、日韓の歴史のことなどを率直に話し合いながら、
日韓それぞれに、夢と希望をもてる社会にするために何ができるか、共に考える。
- 東アジアの和解と平和、世界の平和のために何ができるか、一緒に考える。

<概要>

- ◇主 催：日韓和解と平和プラットフォーム
- ◇開催日程：2024 年8月 26 日（月）～30 日（金） 4泊5日
- ◇開 催 地：韓国・済州島
- ◇参 加 者：日本側 20 人＋韓国側 20 人

《DAY 1 8月26日(月)》

Time	Program	Location
13:50-14:20	開会式 [開会挨拶] ① キム・ギョンミン (日韓プラットフォーム・書記) ② ナム・ブウォン (APAY・事務総長) ③ 比企敦子 (日韓プラットフォーム・運営委員)	アジア太平洋 YMCA 連盟
14・30-16:00	ワークショップ① : 安全な学びのグループ作り	
19:00-20:30	ワークショップ② : 身体活動-社会的記憶	三多総合社会福祉館

《DAY 2 8月27日(火)》

Time	Program	Location
10:00-12:00	現場探訪① : 4・3ダークツアー	4・3平和公園
13:00-16:30	現場探訪① : 4・3ダークツアー モクシムル窟-北村-日本帝国洞窟陣地	
19:00-21:00	ワークショップ③ : 分かち合い	三多総合社会福祉館

《DAY 3 8月28日(水)》

Time	Program	Location
10:00-12:00	現場探訪② : セウォル号記憶館 青少年活動家と記憶館観覧及び活動紹介	セウォル号記憶館
14:00-16:10	ワークショップ④ : 沖縄と済州 ●地続きの島じま neighboring islands ... ウミ ●済州海軍基地竣工後も続いている江汀平和運動 ... ヘヨン(江汀村活動家)	4・3平和教育センター講堂
19:00-21:00	ワークショップ⑤ : 声明書作成のための話し合い	三多総合社会福祉館

《DAY 4 8月29日(木)》

Time	Program	Location
10:00-12:30	現場探訪③ : 江汀村 江汀村巡り-生命平和ミサ-人間の輪作り	江汀村
14:00-17:30	ワークショップ④ グループ別観光 ●中文橋達海水浴場 ●コッチャワル-森 ●西帰浦市内	
18:00-21:30	Sharing Life Stories Farewell Party : 閉会式	
19:00-21:00	ワークショップ⑤ : 声明書作成のための話し合い	party room「ソグィゴッ」

《DAY 5 8月30日(金)》

Time	Program	Location
10:00-11:00	移動	済州国際空港

◆2024 ユース平和フォーラム 参加者名簿

●韓国側●

기하늘	KI HANLE	韓国外国語大学・学生
김선화	KIM SEONHWA	アジアの歴史平和と教育連帯・活動家
김수민	KIM SUMIN	大学 YMCA 嶺南大学・会長
김진선	KIM JINSUN	ピースモモ・コミュニティラボガバナンスマネージャー
김진수	KIM JINSU	韓国キリスト教青年協議会・総務
김현지	KIM HYEONJI	大学 YMCA 京東大学・副会長
노승혁	NOH SEUNGHYUCK	韓国キリスト教青年協議会・幹事
박준성	PARK JUNSEONG	進歩大学生ネット・会員
오혜진	OH HYEJIN	大学 YMCA 京東大学・会長
위정현	WI JEONGHYEON	カトリック北東アジア平和研究所・青年
이재선	LEE JAESEON	興士団全国青年委員会・副委員長
이지원	LEE JIWON	参与連帯平和軍縮センター・幹事
이태준	LEE TAEJUN	統一人文学研究団・HK 研究員
조영우	JO YWONGWOO	済州大学・学生
최휘주	CHOI HWIJU	進歩大学生ネット・会員
현나은	IAN HYEON	韓国 YMCA 泰齋大学・会長
이유진	LEE YUJIN	韓日和解と平和プラットフォーム／正義記憶連帯・活動家
양다은	YANG DAEUN	韓日和解と平和プラットフォーム／YMCA
최예린	CHOE YERIN	
한희수	HAN HEESOO	韓日和解と平和プラットフォーム／YMCA

●日本側●

五十嵐望美	NOZOMI IGARASHI	CWS Japan
大倉 桃香	MOMOKA OKURA	白百合女子大学
宮本 樹	MIYAMOTO ITSUKI	北海道教育大学
杉本莉里子	SUGIMOTO RIRIKO	国際基督教大学教養学部
嶋田 健治	SHIMADA KENJI	バプテスト連盟日韓・在日連帯特別委員
潮江 勇太	SHIOE YUTA	神奈川外キ連／社会人、現在職業訓練中
阿波加舞弥	AWAKA MAIYA	主婦をしながらフリーでナレーター
阿波加 寛	AWAKA HIRO	敬和学園高校教員（地歴公民） 演劇部顧問
来島 愛結	AYU KIJUMA	明治学院大学 文学部芸術学科
柳下李詩歩	SHIHO YANASHITA	関西学院大学大学院社会学研究科 1 年
大和 泰彦	YAMATO YASUHIKO	神戸学生青年センター／むくげの会
大栗 夢加	OGURI YUMEKA	明治学院大学
李 耕 守	LEE KYUNGSOO	国際基督教大学教養学部 2 年
井上 里穂	INOUE RIHO	札幌大谷大学 4 年
半田 歓喜	JOY HANDA	早稲田大学大学院
柳川 朋毅	TOMOKI YANAGAWA	上智大学大学院／イエズス会社会司牧センター
濱名 佳純	HAMANA KASUMI	
UMI		* 発題講師
柳 時 京	RYU SIKYUNG	* 通訳
細井 留美	HOSOI RUMI	* 引率

◇2024 ユース平和フォーラムに参加して・・

◀韓国側参加者▶

● IAN HYEON ———●

日韓ユース平和フォーラムの初日、私たちの話はフォーラムのテーマの紹介から始まりました。フォーラムのテーマは「国家暴力」であり、単にその概念を理論的に理解することにとどまらず、済州島の様々な現場を訪れ、国家暴力の現実を身をもって体験しようという趣旨でした。国家が行使する暴力の痕跡を直接感じ、その中で私たちがどのように平和を語るができるかを考えてみる時間を持とうという意図でした。このテーマは、単に学問的な探求ではなく、私たちの心と体を通して直接感じ、現実に向き合うことで学びの深さを増す過程になることを強調しました。

フォーラムが本格的に始まる前に、ピスモモのジンソンさんによるプログラムがありました。ジンソンさんは、学びの始まりを有意義に開いてくれました。その始まりは、「みんながみんなから学ぶ」というピスモモの理念に基づいたものでした。私たちは通常、「学ぶ」というと、誰かが教える、誰かが学ぶという一方的な関係を思い浮かべます。しかし、ジンソンさんは、このフォーラムでの学びはそうではなく、お互いがお互いに学び合う対等な関係であることを強調していました。円形に座り、お互い顔を向き合い、それぞれの声や経験を尊重する過程で学びが起こるということです。これは、このフォーラムの全体的な雰囲気形成する重要なメッセージであり、参加者そ

れぞれが学びの新しい視点を開くことができました。

学びの第一歩を踏み出すにあたり、ジンソンさんはいくつかの約束を私たちと共有しました。

1) みんなが学ぶ、共に学ぶ : 私たちは一方的に誰かに教えを受けるのではなく、共に学ぶ存在であることを心に留めておかなければなりません。そのため、私たちは円陣を組んでお互いの話を聞き、またその話を通して自分の考えを共有する過程が重要であることに気づきました。

2) 繊細に気づく : 私たちのバックグラウンドは皆違います。それぞれが異なる文化、異なる環境で育ち、その多様性は私たちが持っている貴重な資産です。しかし、この違いを単純に受け流すのではなく、その違いを繊細に気づき、尊重することが重要であることを学びました。他者の違いを尊重すると同時に、自分自身のユニークな背景や感情に気づくことも欠かせません。私たちはお互いから学ぶことができるのと同じくらい、自分の中からも学ぶことができるというこの約束は、学びの幅を広げてくれました。

3) 今、ここにいることの特別さ : 私たちはますますオンラインで多くのことを解決する時代に生きています。その中で、このように直接顔を合わせて、同じ空間で話をする時間が少なくなっています。しかし、ジンソンさんは、この瞬

間、私たちが物理的に一緒にいる時間の大切さを気づかせてくれました。この瞬間こそが、私たちが平和を作るための出発点であり、いつかこの瞬間を振り返って「あの時、私たちは平和を作ることができた」と思い出せるようになることを願っています。その言葉は参加者の心に深く浸透し、この場をより特別なものにしてくれました。

このように学びの原則を共有した後、私たちは自然にそれぞれの話をする時間に移りました。それぞれの名前、感情、そしてこのフォーラムで最も楽しみにしていることをチームごとに共有し、これから5日間一緒に過ごす人々と親しくなる時間を持ちました。その過程は単なる自己紹介ではなく、お互いの心を開くプロセスであり、名前と顔を覚えるその瞬間にも、すでに私たちは少しずつ一つ一つになっていました。

続いての時間には、全員が丸く円陣を組んで座り、「招待ゲーム」という活動を通して、お互いを

より深く知る時間を持ちました。空席に座った人は両隣に他の人を招待する形で行われ、その中で私たちは自然に手を繋ぎ、会話を交わし、親しくなることができました。このゲームは単に時間を過ごすだけでなく、私たちがお互いに近づき、心を開いていく過程で大きな役割を果たしました。

私たちは、お互いがお互いに影響を与え合い、お互いから学ぶことができる貴重な存在であることを改めて感じながら、初日を終わりました。この出会いは、単にこれからの5日間の旅を共にするための準備過程ではなく、それ自体がすでに重要な学びの瞬間であり、平和を築くための第一歩でした。この特別な始まりが、これから私たちが進む道にどれほど大きな意味を持つのか、期待と興奮に満ちた時間でした。

● KIM SUMIN ———●

◇支配者の意志だけの問題か。

私たちは、悪いことが起こるのは悪い人の意志によって起こると知っています。そして、組織や団体、国家も悪い支配者によって社会に悪いことが起こると簡単に受け入れます。私たちは2人組人形劇を通して再認識しました。

しかし、果たして支配者の個人的な意志だけの問題なののでしょうか。もしかしたら、構造やシステムがそうなるしかないのでしょうか。私たちは団体人形劇を通して、真ん中にいる人（完全なmover）の小さな動きが、真ん中から離れた人に大きく移動しなければならないことを体験しま

した。これにより、このように設計された構造のせいだと感じることができました。

もちろん、支配者の意志も排除できないでしょうが、支配者の邪悪な意志が思う存分発揮できるときに制裁できる装置がない構造、小さな邪悪な意志が大きな悪事になるしかない構造など、このような構造にも間違いがあることを実感しました。

したがって、平和を実現するためには、個人の意識だけでなく、構造やシステムも整えなければならないでしょう。

◇どの構造が正しいとは言えない。

私たちは人形劇と三角形を通して平和を体験しました。支配と被支配が明確な人形劇よりも、不鮮明な三角形の方が平和な構造だと無意識のうちに受け入れていました。しかし、果たしてそうでしょうか。

支配と被支配が明確な場合、支配者の意志が大きく影響します。最大限被支配者に配慮すれば、平和な状態が来ます。一方、常に三角形を形成するために緊張しなければならず、そのために常に移動しなければならない「三角形」のような場合、

果たしてこれが平和な状態だと言えるのでしょうか。

私たちは人形劇を通して、平和を成し遂げるために支配者の意志に頼るしかない構造と、「三角形」を通して、誰もが平等であるが、それゆえに誰もが平和であることが難しい構造を見ました。

このように、私たちはどのような構造が正しいとは言えません。どのような形の構造であっても、それぞれに長所と限界があります。私たちは絶えず平和な構造を見つけようと努力しなければならないでしょう。

● WI JEONGHYEON ———●

モクシムルグル、のどかで美しい森の中に虐殺の歴史が息づいていました。1947年の三一節記念行事で起こったことに対して謝罪を聞いたかった人々は、群れをなして山の中に逃げ込むことになりました。分断されない国を夢見ていた人々は殺されました。米軍とその国が彼らを「赤」と名指ししたからです。

1948年12月21日、肅清作戦の最中、サンフリに住んでいた住民は肅清隊を避けて溶岩洞窟に身を隠しました。救世主が生まれたという12月25日、クリスマス。モクシムルグル周辺のドートル洞窟で20人の青年が発見され、そのうち15人が殺され、ハムドク大隊に連行された5人の若者のうち1人が拷問に耐えられず、モクシムルグルに人々が隠れていると言いました。翌日、討伐隊は迫撃砲と、拷問を受けた青年を先頭にモクシムルグルに到着し、200人余りの住民を捕虜にし、そのうち30人余りの住民を虐殺し、その遺体を焼却しました。

その後、モクシムルグルで捕まり拷問を受けた人が、他の二つの洞窟の位置を話してくれました。おそらく他の洞窟でも虐殺が行われたのでしょうか。

私はこの話を聞いて、悲惨さを感じました。これが果たして人間が人間にできることなのだろうか。

戦争は人間をこんなに非人間的にするんだな。この済州4・3がより胸が痛かった理由は、生き残ったことに罪悪を感じた人たちのためでした。銃殺されて死んだ人、拷問に耐えられず隣人が隠れている場所を案内した人、かろうじて隠れて虐殺現場を見聞きしたものの、生きるために知らないふりをした人、家族を失って討伐隊の捕虜になった人、そして赤軍に追われて虐殺されることを恐れて家族を見ないふりをした人。虐殺された人たちと生き残った人たちは、お互いがお互いに傷を与え合いました。死んでいく自分を見殺しにする家族を見るのは、とてもつらいことです。愛す

る家族や隣人が死んだ墓、その上で生き残った人も死ぬほど苦しかったでしょう。

濟州は平和の島です。4・3事件を隠すために平和という言葉がプロパガンダとして使われるかもしれません。しかし、私たちは、少なくとも濟州4・3を知る人たちは、濟州の住民がこの「平和」を実現するためにどれだけの勇気を出したのか、どれだけの長い間、息を潜めていたのかを知っています。

まだ濟州は様々なことで苦しんでいます。観光地開発による自然環境破壊と江汀海軍基地、現政

府の情熱的な歴史歪曲。しかし、濟州はまだ平和を夢見ています。

その夢を誰も軽く考えることはできません。

私たちは平和をもっと大きく叫ぶでしょう。

最後に私の好きな一節を一つ書きたいと思います。

このすべての上に愛を着てください。愛は完全に結びつける紐です。(コロサイ3:17)

何本にも分かれた私たちが、一日も早く愛で一つになることを願っています。

● KIM SEONHWA ———●

ナブンスンイ4・3記念館から北村村4・3道を歩いて濟州西浦峰(ソウボン:서우봉)日帝洞窟陣地に行きました。濟州徐禹峰日帝洞窟陣地に行く道は海辺の近くにあるので、青い空とエメラルド色の波がいっぱいの海は心を奪うのに十分でした。そして、日差しの強い日だったので暑かったのですが、濟州徐禹峰日帝洞窟陣地に行く山道は木が多く、少しは涼しく感じられました。濟州島の洞窟陣地は決戦7号作戦で作られたそうです。全20の陣地洞窟のうち、今回私たちは3つの陣地に入り調査を行いました。この3つの陣地は「王」字で繋がっているそうです。陣地洞窟は明かりがなく暗く、足元は水に濡れて泥だらけで、携帯電話の光(懐中電灯)なしでは前に進むことができませんでした。この中を歩きながら、日本統治時代にここにいた兵士たちと4・3時に隠れていた人々の立場になって考えることができる時間でした。

解説者の先生曰く、松岳山にある海岸の陣地は船を攻撃していたところであり、聖日出峰には船

が海に出られるように誘導する道があるそうです。海岸には魚雷と船が出る陣地であれば、ここ濟州西浦峰の日帝洞窟陣地は武器を隠したり、兵士たちの陣地だったとも言われました。そして、4・3時には崖から多くの人を殺して落としたという話も聞きましたし、人々がロープを固定して降りてきて遺体を回収したという話も聞きました。この話を聞きながら、日本統治時代から4・3までの歴史が、私たちが少し見学した陣地洞窟の中の暗闇と同じくらい暗いのではないかと思います。未だにこの4・3の正確な名前を付けられず、まだ残っている問題について考えながら、まだ鎮守府洞窟のように暗いトンネルの中にいるのではないかと思います。これからもっと多くの人が行動し、動いて、いつか暗いトンネルの中から出て、明るい光が少しでも見える日が来ればいいなと思いました。

ここ濟州西峯日帝洞窟陣地は日帝強占期には軍隊がここを陣地として使用し、解放後は住民が4・3時には避難所として使用したり、農産物を

保存する空間だったそうです。そして現在では記憶する平和教育の場として平和を語る場所になっていると解説者の先生が言っていました。この話を聞きながら、今後はもうここがもう一つ

● JO YWONGWOO ———●

セウォル号記憶館は悲しいものを見せず、暖かい雰囲気を与えるために努力したそうです。濟州島が観光地なので、悲しい感じより暖かい感じがいいのではないかと思います、このように飾ったという説明でした。特に活動している青少年の集まりは、22年のセウォル号8周年を準備するために作られたそうです。年齢は中1～高3まで。日常生活にセウォル号事故を知らせ、公正で正しい社会を作ること为目标に活動しています。主な活動としては、下校時にリボンを配ること、船上安全モニタリングによる安全を守ること、月に一度、記憶館でリボンを作ること、社会的惨事に関する勉強などを行っているそうです。

活動家との質疑応答をまとめました。

◇悲しみをケアする過程で大切にしていることは？

一次的に悪いもの（メディア、記者、変な人）を遮断することが一番重要です。

◇青少年の活動を始めたきっかけは？ リボンを配るときの人々の反応は？

年齢を重ねるにつれ、セウォル号事故を見た時、被害者が私と同じ人間であることを知り、さらに安全に旅行をしたいと思いました。安全な社会で暮らしたいと思い、そのために活動を始めました。無言でリボンを受け取ったり、4月じゃないのになぜ配るのかと尋ねる人もいます。

の暗い歴史の中の一つの歴史的な場所ではなく、今と同じようにこれからも「平和」を語ることができる場所であってほしいと思いました。

◇励まされた瞬間は？

どのような悲劇でも、記憶館を運営することで、他の悲劇の遺族の羨望を買うことができるかもしれないと思ったこと。10年という時間は十分に忘れることができる時間です。

セウォル号事故の遺族と話していると、どうしても昔の話が出てくる。あの時はそうだったね、と笑いながら始まった話は、いつの間にか涙でいっぱいになっている。最初は泣くべきなのか、笑うべきなのか戸惑ったが、すぐに遺族の心情と気持ちに気づく。誰かが明らかにしなければならぬという思いに力を得る。

様々な遺族や人々と出会いますが、応援を受けるときに一番力を得るようです。

◇なぜ、私たちの心にセウォル号は刻印のように刻まれてしまったのだろうか。

犠牲者の多くが青少年であるため、遺族が悲しみだけにとどまらず、前に進もうとしたからこそ、いまだにセウォル号が語られるのだと思います。

真相究明ができず、リアルタイムで沈没を見守り、その過程で全員の生存のような誤報による混乱など、哀悼期間を持つしかない特殊性がある。

初めてセウォル号記憶館に入った瞬間、実は何の感情も湧きませんでした。私は慣れたつもりでした。10年という時間が経ったので、もしかしたら忘れたかったのかもしれない。何の感情

も感じなかったのは、私が目を背けていたからだ
と気づくのに時間はかかりませんでした。活動
家たちの話を聞きながら感情が高まり、知らず知
らずのうちに涙が出ました。今でもセウォル号と
いう話を聞くと涙が出ることに自分でも驚き、少
し恥ずかしかったです。

最近、周りを見渡すと、セウォル号を覚えてい
る人はあまり見かけません。覚えていないことを
超えて、冗談のネタにすることもあります。恥ず
かしながら私の周りの人の話であり、私はその中

で生きてきました。だから私も目を背けたかった
のかもしれませんが。きっと忘れるのは楽だし、そ
うすれば彼らが不快なことを言われても何とも
思わずに済ませられるから。

今は少し不快になってみようと思っています。
友達の言葉に不快感を感じて表現できる人にな
ろうと思っています。自分自身に恥ずかしくない
ように、最低限の努力はする人になろうと思った
一日でした。

● KI HANLE ———●

1. 沖縄：地続きの島じま by UMI

沖縄の辺野古には普天間米軍基地の移設を名
目に新しい基地が建設されています。これに反対
する地元住民や地元以外の方は、12時に基地建設
のために搬入されるトラックに合わせ、座り込み
をしています。これは過去 10 年間、月曜日から
金曜日まで平日毎日行われています。このような
座り込みは、激しく抗議しないという点では意味
がないと思われるかもしれませんが、座り込みさ
えなければ、基地建設のためのトラックが 24 時
間いつでも作られる可能性があるという点で、十
分に意味のある行為と言えます。

このような基地建設は、単に沖縄の辺野古だけ
に影響を与えているわけではありません。近隣
の岩場や川から砂や土を運び込み、空軍基地の移
設と建設は、沖縄の環境と地域住民の生活に大き
な影響を与えています。

沖縄は以前から日本の軍事化の集中地域です。
日本統治時代には 145 か所以上の慰安所が設置さ
れるほど局所的な軍事化が行われ、日本の植民地
主義が現在まで続いています。これは、人々が暮

らす沖縄という空間で展開され、日常の恐怖と結
びついています。

慰安所の設置によって沖縄は性的暴力の被害
にさらされていましたが、米軍占領期以降、そし
て米空軍基地設置後に米軍が少女をレイプする
事件が起こるなど、性的暴力と軍国主義が絶え間
なく連綿と続く様相を見せます。そのため、日本
全国では性的暴力に反対するデモである「フラワ
ーデモ」が存在します。

人間と人間がつながり、人間が住む島で同じ苦
しみが繰り返されることを踏まえ、講演者の UMI
はそれを「地続きの島じま」と付け加えています。

2. 済州海軍基地完成後も続く江汀平和運動と 江汀連山湖モニタリング

by チェ・ヘヨン（江汀友の会）

済州の江汀村では 2007 年以降、海軍基地建設
に反対する運動が続いています。クルムビ岩の上
に海軍基地が建設され、自然の中で生きている多
くの生命も消える危機に瀕しており、これは現在
進行形です。済州海軍基地建設は 2002～05 年の

間、華順（ファスン）に計画されましたが、激しい反対運動に阻止され、2005～07年には威民（ウィミン）に計画されましたが、これも同様に阻止されました。毎回海軍基地の場所決定の度に住民の激しい反対にぶつかり、江汀村は説明もなくすぐに誘致されました。住民投票で反対が圧倒的に多かったにもかかわらず、海軍基地建設は強行されました。



▲平和な康定川を越えて道を進むと、
海軍基地の東側が現れます。

江汀村を守るための江汀平和ネットワークでは、江汀を守る人たちが江汀の日常行動を行います。午前7時には生命平和百拝、11時には道の上のミサ、その後、人間の輪作りと江汀ダンスも一日の日課の一つです。また、江汀連山サンゴのモニタリングは、海軍基地建設後の江汀村の生態系環境の把握に大きな部分を占めています。基地建設で防波堤が作られ、水の流れが変わり、50%以上のサンゴが減少するなど、海の毀損が大きな問題として浮上しました。そこで、江汀（カンジョン）守護者たちはサンゴを知らせる運動を通じ、

江汀村への関心と生態系の保全を訴え続けています。

江汀村に海軍基地が建設されるまでは、江汀平和運動は海軍基地建設反対のためのものでしたが、完成後も続く運動は江汀村を超えた済州地域の乱開発、平和問題、闘う人々の連帯など幅広い意味を含んでいます。江汀村と沖縄が連帯して毎年5月に行われる平和行進もその一例と言えます。

江汀村海軍基地は「民軍複合型観光美港」という名前で、本来の海軍基地の政治的・軍事的目的を隠しています。クルーズの入港を通じて経済的な利益を住民は期待しましたが、これも1年に10回以下です。これは民軍複合型観光美港という名前で海軍基地の本来の目的を包み込み、島民と村民を賛否両論に分断させました。

済州は4・3以後、平和の島というニックネームを得ましたが、済州はまだ平和の島として生まれ変わることができていません。国家暴力という痛い歴史を乗り越え、平和の島として生まれ変わろうとした済州は、海軍基地という軍事基地で沖縄と同じように日常の恐怖と結びつく場所になりました。



▲海軍基地前で平和のためにデモを行う済州青年平和フォーラムのメンバー。デモ中、基地内の兵士たちは興味深い表情で見入っていた。

歌<済州島の青い夜>は、「本当にあなたが孤独だと感じたら、去ってください済州島の青い夜空の下へ」と歌っていますが、済州の内面と歴史を知って済州を離れるには、どの場所よりも済州

が最も孤独な場所かもしれません。それでも私たちは済州を連帯と平和の場所として育てていくために努力しています。

● KIM JINSU ———●

六千日以上も闘争しています。江汀川がひときわ輝いていた日、生命平和ミサのテントに集まった40人余りの青年たちは、その長い時間の重みを全身で感じました。道端に積み上げた碑石一つ、木板一つも無駄に置かれたものはありませんでした。日差しと風に擦り切れた様々な標識が寂しさを感じさせました。クルムビが横たわっていた場所には、すでに戦争の練習をする建物が建っていて、トラックが出入りする工事現場の門はどこにもないのに、青いテントだけがその場所を守って立っています。基地建設を止めるために鉄の扉を叩いていた人々は、同じ場所で今日も何かに向かって叩き続けています。いったいどんなドアを叩いているのでしょうか。

私たちは見ました。黄色い彫刻船を見下ろすイーゼス艦がどれほど巨大なのか、江汀川を取り囲む塀がどれほど高いのか、海軍基地を守る鉄の網がどれほど鋭いのか。どうしても押し出せない石の門のようなそれは、戦争、暴力、紛争、不正、力が約束する偽りの平和でした。川辺の守護者たちは、このような巨大なものに向かって抵抗していました。

私たちも一緒に叫びました。平和の島に海軍基地など必要ないと叫びました。ヤンヤンホを殺すなど叫びました。戦争の練習をやめろと叫びました。「クルムビヤ起きろ！」と叫びました。こ

のように小さなたたきが積み重なっていけば、どんなに重い石門も揺らぐのではないのでしょうか。光が一点も入らないイエスの墓をついに押し出した力、私たちを阻止していたものを押し出す力をお互いに感じました。

古い予言によると、来るべき新しい国では、世界中の人々が一堂に会し、平和の歌を歌うそうです。その国は、正義のために苦しむ人々の国です。平和を作る人々の国です。何よりも大切な命の価値を信じる人々の国です。

その日、江汀村でその国を垣間見ました。身体を大きく膨らませ、銃を構えて立っている兵士たちを気にせず踊りながら歌う時、そこにいました。固く閉ざされた鉄門が見えないように旗を振って歩く時、そこにいました。一緒に囲んだ小さな食卓の上に、私たちが作っていく平和がありました。

握りしめた手を離さないでください。済州と沖縄をつなぎ、江汀と辺野古をつなぎ、私たちの日常をつなぎましょう。沖縄の苦しみの中に私の苦しみを見つけ、江汀の平和の中に私の平和を見つけましょう。構造を語り、連帯を作り、スローガンを叫び、正義を歌いましょう。私たちが一緒に作った三角形を、街で、地域で、それぞれの場所で作っていきましょう。私たちの中から湧き上がる勇気が、閉ざされた扉を大きく開くでしょう。

◀日本側参加者▶

●半田 歓喜——●

4・3事件ダークツアーで印象に残ったことは、北村小学校跡地、特に赤ん坊のお墓です。幼い子供たちはアカの思想をもっていないにも関わらず犠牲になりました。赤ん坊のお墓を見て、特に何の罪もない者が虐殺される痛ましさをひしひしと感じました。

4・3の痛みを通して、この痛みが現在世界で起きている戦争のおぞましさを私に再起させてくれました。戦争犯罪は今も起きていて、何らの罪のない人々が苦しんでいる。戦争こそが究極の国家暴力であることを痛感しました。

現代においても、世界各地で4・3は続いていることに気づき、ユースフォーラムを通して、日韓の歴史を学ぶだけでなく、平和への思いを馳せ、平和を実現するために自分に何ができるのか考える大きな契機となりました。

そして、戦争と平和を考える上で、カンジョン村の基地反対運動と繋がることを知りました。カンジョン村で活動されているヘヨンさんの講演を通して、軍事基地開発が人間の暮らす土地を奪い、住民を分断させるだけでなく、海の生態系を脅かすということを初めて知りました。地球に暮らす人間が自然生態系を守るべき責任を感じました。

第1回ユースフォーラム開催時の坡州では、日米韓合同軍事演習が行なわれていました。その当

時、一部の参加者がどうして怒りの声を発しているのか、理解しきれていない自分がいました。しかし、今回カンジョン村を訪れて、2年前のパズルのピースがはまったように思います。各国の軍事力強化が何を意味するのか、国民が主権者であり、国家権力は抑制されなければならないという大原理の中で、その原理とは反対のことが行なわれている社会で、私たちは軍事力強化反対を訴えなければならないと思います。

最後に、3年間ユースフォーラムに参加する機会を与えてくださり感謝します。最初は、義務教育を日本でしか受けていないから、韓国の歴史を学びたいという単純な思いから参加しました。

しかし、韓国の歴史を学ぶ中で、もう一つの自分の国である日本の歴史を学びたいという思いが強くなりました。日本と韓国は、植民地支配の加害者・被害者という側面だけでなく、隣国として、それぞれの痛みに関心し、手を繋いで共に未来を見上げる国であるべきと思うからです。

私たち一人一人は、日本と韓国の架け橋です。そして平和を実現する者です。

青年の時にユースフォーラムに出会い、人生観が変えられたことに感謝します。これからも皆さんと共に、連帯し続け、日本と韓国の真の和解のために活動していきたいと思います。

●宮本 樹——●

今回のプログラムで学んだ、済州4・3事件は今まで聞いたことのない事件でしたが、日本とも関わりがあり、悲惨で残虐な事件であったことがわかりました。済州の現地の方に話を聞きながら、事件について学びましたが、その話が少し難しく

感じました。日本に住んでいて、世界史なども日本の視点で学ぶため、文化の違いなどから済州目線の話し方では難しかったのではないかと感じました。中学・高校・大学では、「他国とは文化に違いがある」などと学んでいましたが、実際にそ

れを感じることは滅多になかったため、今回文化の違いを実際に感じる事ができて良かったです。

また、セウォル号沈没事件も名前は知っていましたが、事件当時は小学生であったため、ほとんど覚えていませんでした。セウォル号記憶館ではインターネットで調べても出てこないような当時の状況を聞くことで、私と同年代の高校生が多く亡くなったことに対してとてもつらい気持ちになりました。

1日活動してグループで振り返る活動は、わからなかったところや疑問点などを共有できた

● 嶋田 健治 ●

私が講師をしている四国朝鮮初中級学校の関係者には、済州に思いを寄せておられる方がいらっしやいます。そのことを胸に、飛行機の窓から済州の土地をみていました。また、事前学習で済州空港は、多くの民衆が虐殺された土地でもあり、今でも遺体が眠っておられるとお聞きしていました。ですので、その両方の歴史が結ばれていくように、済州に降り立ちました。

「歴史から学ぶ」というのは、時に傷になります。自身の当事者性が際立ち、歴史から問われるからです。私は4・3事件の歴史的背景に、大日本帝国による朝鮮侵略が強く影響していると考えています。侵略があったことで、政治を混乱させ、対立を生み出し、虐殺が起ってしまった。4・3事件は日本の歴史に無関係ではなく、断腸の思いでした。セウォル号事件や、沖縄の問題に関しても、国家権力(政治)による暴力によって民衆が死に至ることがおこっています。この出来事に私たちも向き合い、傷を見つめることに恐れず、しっかりと鈍い痛みを感じ、癒していきたいと思います。

そして、それぞれの思いをもった参加者との新たな出会いや再会に心から感謝いたします。それぞれの現場や済州での学びから得た経験や知識、

め、とても有意義だったと感じました。特に済州4・3事件については難しいと感じたところもあったため、それぞれの思いを共有する時間があるのは、自分の感じていることを整理することにもつながって良かったです。しかし、その日の活動を通して一つキーワードを決める活動は、難しいと感じました。

1日活動したり、話を聞いたりして、たくさんのことを学び、感じる事ができたことがわかりました。

思いから、フォーラム全体を創り上げるような空間となっていたと思います。毎日行なわれたワークショップでは、お互いに関心を持ち、意見を聞き合い、大事にし合っていると感じました。何よりも大事なことは、フォーラムに集まっている私たちが連帯することにあると思います。私が思う連帯とは、作業を手伝うことや、運動をつくることだけではなく、お互いの心にお互いの住まいをつくり共振することです。私にとって参加者の皆さんは遠くにいますが、未だに傍で笑っているように感じています。繰り返した真剣に語り合い、聞き合い、食事をし、笑顔が芽吹く時間は、私たちの未来を予感させます。対立から生まれる争いに対する最高の抵抗は、私たちが愛をもって連帯することです。フォーラムは今回で最後でしたが、今後の連帯についても模索していきます。

現実は残酷で、心が壊れそうになるときがあります。しかし、私は、このような出会いによって何度も平和の息吹を与えられます。私たちなら、きっとそれぞれの場で、私たちが夢みる平和と和解が実現できることを信じています。歴史の内に殺害されていった魂と、平和へと歩みゆく神の子たちに祝福がありますように。

●井上 里穂——●

3回目にして初めての参加、間に合ってよかったと思った。叶うならば2年前からこのフォーラムの存在を知りたかったが、この1回だけでも、自分の存在を捉えなおすには十分だった。

印象に残っていることはたくさんある。しかしそれらは、あまりに雑多すぎてひとまとめには語れない。たくさんのことの中からひとつだけ、取り上げて書いてみようと思う。

フォーラムの中で2回示された、「記憶はどこに残ると思いますか？」という問いかけ。最初にこれを問われたとき、頭に、心に、土地に…など、いろいろなことを考えた。一つの答えとして用意されていたのは、「記憶は身体に、社会の記憶はわたしたちに、私たちの記憶は資料に」という言葉だった。とても納得感があつた。脳で処理した情報のことだけを、「記憶」と呼ぶのではない。身体に残った感覚、心に残った感覚、事実として覚えたこと、知識として蓄えたこと。「記憶」は、そういうすべてのものの複合物。事実を知っても、他者の体験を聞いても、土地に刻まれた歴史を見ても、そこにある感覚に共感しようとする心がなければ意味がない。だから、他者の身体の感覚、心

の感覚に少しでも近づこうとする柔軟な想像力が必要なのだと知った。そして、形にしがたい部分もどうにか形（資料）にして残していこうとすること、その作業自体が「記憶する」ということなのだと気がついた。フォーラムの間は、感じたこと、知ったこと、暑さや眠気や鳥肌といったことまで、可能な限りその場で書き留めておこうと思った。些細な身体の感覚の中に、誰かから受け継いだ大切な記憶が隠されているかもしれないから。

フォーラムに参加する中で、自分の無力感、というか、“無価値感”をずっと感じていた。無力感を感じる以前に、自分はそもそも何もしていないではないか、という感覚。その感覚の冷たさに凍えそうになるとき、いつも「記憶する」という言葉を頭の中で繰り返した。まずは、記憶するところから。知識や感覚をできるだけ生々しく書きとめ、形にしていこうとするところから。

「わたしは今、何もしていない」ということと、「わたしにも今、できることがある」ということを教えてくれたユースフォーラム 2024 に感謝しています。

●李 耕 守——●

3年間計画で行われた交流プログラムに、2回つづけて参加しました。日韓ユース平和フォーラムに参加し、共に、歴史に心を痛め、歴史から今もつながる社会、国家の課題に悩み、どう平和を作れるかを国を超えて対話できる人と出会えることに魅力を感じます。

また、プログラム協力として庭野財団が多くの支援をしてくれていたということにも魅力と意味深さを感じます。庭野財団は、宗教理念をもって、宗派、宗教という垣根を超えて、様々な形で平和を見出すことに助成を行なう財団であると認識しています。何か枠に縛られることなく、平

和を願い、平和を作ろうと実践する幅広い年齢の人、様々な学びをしている人が集うフォーラムにおいて、庭野財団の助成のもと、プログラムが開けていたことが幸いだと思います。

私は、全体のプログラムを通して、ある聖書に記された言葉を思い出しました。「わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを」（ローマの信徒への手紙5章3～4節）。「苦難」と「希望」この対比的な言葉の両方を、プログラム中に感じました。「苦難」は、セウォル号のことを思い、感じます。ご遺族の方、犠牲となった一人ひとりとな

がりをもつ人、真相究明に取り組む方、セウォル号のことを知っている人、今回プログラムに参加し、現実を目の当たりにした人、多くの人の心に傷を与える事件でした。未だに、解き明かされていない事実をもって、「苦難」を感じる部分があります。しかし、一方で、「苦難」の中にも「希望」を求めて進もうとする姿も見えました。

●阿波加 舞弥——●

今回で初回から3回目の参加となった、ユースフォーラム。自分の無知さを恥じた1回目、学べば学ぶほどに現代に繋がる問題に溢れた2回目、そして今回は沢山の話し合いから改めて歴史を学ぶ大切さを感じた3回目でした。全3回のフォーラム全てに参加して、段々と深い話が出来ようになったと感じています。だからこそ、これからも毎年オンライン・オフラインに関わらず集まり、考えを共有して行きたいと思いました。

今回参加者の方々と語らう中で、継続した話し合いや、個々の活動の共有できる場所を作れるのもっと平和活動として社会に機能するのではないかという話がありました。そして互いに共有していく中で、それぞれの国だけの問題に留まらず、すべてが繋がっていると感ずることも多くありました。この3回の集大成として、声明文が作られたこと、そして互いに学び合いや話し合いが出来たこと、本当に幸運であったと思います。そし

この世界には、待っても待っても自分たちが思う平和がやってこない現実があるなと思います。この時間がなんとも虚しく、しかし、待ちながら求めることが途絶えてしまうと平和は実現しないと感じます。「苦難」の中にも「希望」をもって歩んでいきたい、また、違う形でもこのプログラムに連なった人々と交流し続けたい気持ちです。

てこれからも沢山のまだ見ぬ方々と共に学び合えるこの場所を継続できるようにしていきたいです。

今回のフォーラムを受けて、日本在住組でのフィールドワークや共有をもっと気軽にしていきたいと感じました。韓国在住側の皆さんの連帯力にはまだ劣るように思ったからです。やはり平和活動において、全ての問題が別々ではなく、歴史と共に繋がっているという感覚は肌感覚で持っておくべきだと感じる場面が多くありました。

人間関係においても、国家間においても、また国家と国民の間にも、考え方のズレや埋められない部分はあると思います。そこを埋めるのは歴史に学んだことで培われているはずの想像力に起因される歩み寄りだと考えます。この想像力を鍛えるためにも、日本と韓国に限らず、多くの歴史を学び、そして現代に眠るあらゆる問題を分かち合うことを諦めずに歩んでいきたいです。

●阿波加 寛——●

8月26日から30日の5日間、韓国済州島にて開催された、日韓和解と平和プラットフォーム主催「ユースフォーラム」に参加しました。

日頃、新潟の敬和学園というミッションスクールで高校生と接している私として、回を増すごとに多様性の増していく同世代参加者との談論風

発としたこのフォーラムに参加できることは、この上ない喜びであることをまず理解していただきたいのです。この浮いた想いは、生活に忙殺されるユース世代に、あるいは大学生参加者にも共感してもらえることではないでしょうか。しかし、中国と日本の国交において強い緊張感が走って

いる今、その最前線に有史以来立ち続けた「島」である済州島を振り返ることから始める必要があるでしょう。

まさに「済州島概論」と呼ぶに相応しいプログラムを韓国側スタッフの皆様が練ってくださいました。島全体に思想のレッテルを張り付けた虐殺事件、島を夢見ていた若者たちを巻き込んだ重大事故、アジアの軍事情勢を激化させるため島民を引き裂いた基地建設。どれだけ同様の残酷な出来事が世界で起きていようと、この済州島に歴史に対して「なぜこれほど大規模化したのか」という問いはぬぐうことができません。これに対して、あるグループの方が「それは『島』だから」という発言をされていました。人は相手を「島」として認識した時こそ、これだけ大胆に、これだけ隠蔽主義的になることを自覚する必要があるでしょう。

私たちは済州島を「島」として認識しました。それゆえ、類似した問題を抱える「島」である沖

縄を（これには急いでその差異に関する注意をしなければなりません）、学習の良き比較対象として挙げました。しかし、私たちはなぜこの二つの島を同一視してしまうのでしょうか。それは周知のとおり雑な認識です。しかしそう考えてしまうのはなぜでしょうか。同時に、日韓の列島ないし半島から参加したユースがもれなく、自身の住まいも「島」であることを失念してしまうのはなぜでしょうか。

今回の済州島フィールドワークは、自身を大陸だと思い上がっていた私に「島である自覚」を与えてくれました。日韓の、そしてアジアの平和を望むうえで自身の中に巣食う帝国主義に目を向けていかねばならないと気持ちを新たにした次第です。

日頃より支援と祈りを向けてくださる皆様、熱意溢れる参加者を派遣して下さったすべての団体に改めて感謝申し上げます。

●来島 愛結——●

今回私は日韓ユース平和フォーラムに初めて参加しました。韓国の人と交流したい、韓国の歴史を知りたいという気持ちが強く、初めはとても意気込んでいました。しかし私はごく普通の学生です。活動家ではなく、所属があるわけでもありません。学習会が進むにつれ、年齢、経験値、知識、様々な面において未熟な私が、参加したことに申し訳なさを感じました。そのような気持ちと期待が交差しながら向かった済州島でしたが、私は現場を訪れ、多くの人と関わりながら学んだことがあります。それは人間が本来大切にすべきものは何かということです。

このことを最も感じた場所は4・3平和公園です。ここには亡くなられた多くの人々の名前が連なる空間がありました。私は名前という存在を特別に思っています。名前は人間にとって最初に与えられる贈り物であるからです。自分の身内が亡く

なった時にはその人の名前を呼び、悲しむこと、共に過ごした時間を懐かしむことが出来ます。しかしその名前が抹消された4・3事件。そして今もなお名前が見つかっていない人々がいるという事実。人間が大切にすべき名前が抹消されたという事実を忘れてはいけなく強く思ったと同時に、自分の名前を更に大切にしたい、多くの人の名前を思い出と共に記憶したいと思いました。

そして済州島を訪れ、人と関わる中で感じたこともあります。済州島での5日間、韓国の皆さんは私が話すどこかぎこちない韓国語を理解しようとしてくれました。そして翻訳機を使えば簡単に済むはずですが、私が言葉を理解できるように韓国語をゆっくりと話し、沢山声をかけながらそばにいてくれました。街中で聞いた韓国語の多くは理解することが出来ませんでした。共に過ご

した韓国の皆さんが話す言葉は理解できているように感じたのです。それは心で通じ合うことが出来ていたからだと思います。心を通わせ、一人の人間として自分と他者を大切にすることは私たち人間が最も大切にすべきことです。そしてこれから私たちが創り出す未来にとっても重要であると思います。

●潮江 勇太——●

日韓ユースフォーラムへの参加を通じて、私は沢山のことを学び、記憶しました。

私の感想として、今回記憶したことは、悲しみや悔しさといった単純で消極的な言葉で表現するのではなく、記憶して忘れず継承しなければならないものであると考えました。

正直私は、残酷な出来事は目をそむけたくなるくらい苦手ですが、そのくらい苦手な事件を今後私たちが繰り返し犯すことのないよう、まずは記憶し行動しなければならないという理念が生まれました。

また、そのような出来事だけをただ記憶するのではなく、どのようにして平和な社会を作っていくのかということもユースフォーラムの人々と議論し、共に学んで考えました。

印象に残っていることがいくつかあります。

「暴力の種類」です。いきなり不平和な単語ですが、「私たちが平和な社会を作るにはまず、暴力を知る必要がある」ということです。平和の対の状態を把握し、正しく「平和」というのを知るためにも、私たちは暴力の種類を学習しました。

「直接的暴力」

「文化的暴力」

「間接的暴力」

確かこの3つだったと記憶しています。

「直接的暴力」は、文字通り相手に直接危害を与えることです。

様々な世代、国籍の違う人の言葉、優しさに触れ、互いの思いを共有し合った5日間は私に大きな希望を与えてくれました。私は日韓の大きな架け橋になれずとも小さな架け橋を多く作っていききたい。そのために今回学んだ大切にすべきものを心に刻みながら、自分に出来ることを考えていくことが今の自分の使命であると思っています。

「間接的暴力」とは、政府や団体が法律や人などをつかって相手に危害を与えることです。大日本帝国政府・天皇が警察力を行使した様々な人々、特に朝鮮人・台湾人への弾圧・皇民化はまさにこれに当たると考えています。

「文化的暴力」とは古くからの伝統的な暴力など、文化を通じて人々に危害を加えるものを指します。

積極的な平和的解決を実現するには、このうち「間接的暴力」「伝統的暴力」をなくしていく行動が大切であると学びました。「直接的暴力」の解決のみを目指すだけでは危害を与える背景、理由の解決には至らないからです。近年日本で謳われている「中国、ロシア、朝鮮民主主義人民共和国の武装化に対する我が国の防衛の強化」はまさにこの「直接的暴力」の解決のみを目指していて、武装背景としての歴史の中での大日本帝国時代の間接的暴力、文化的暴力への正しい解決を私たちはしていかなければ、不平和は必ず訪れるでしょう。複雑な歴史背景を正確に把握し認め、正しく当事者への尊厳の回復や人権の尊重を国家として行なうために継承し行動することが、地道で長くなりそうながらも、平和への道のりであると考えました。

もう一つはセウォル号記憶館を訪問したことです。

暖かい雰囲気の中ですが、展示物一つ一つを見た時の悲しみと虚しさは今でも脳裏に沁みえています。

船内から通報があったにもかかわらず、警察が「証拠」ばかりを求めて一向に救助を行なわなかったところか、船内放送で当時の高校生達を船内に留まるよう指示してから船長は意図的に逃げ出し、生徒たち含む乗客の命を救えない状態を作ってしまった状況を悲しく感じました。

事件当初、「全員無事である」と安堵した家族達が、現地に向かって聞いた言葉は「助かっていません」ということです。後日高校の体育館で遺体の引き渡しがあり、遺族にとってトラウマがあった人は多いと言われています。

これは、韓国政府による国家暴力とも言われています。沈没しているとの通報を聞いたにもかかわらず警察・政府が一向に救助活動を行なわなかったことが人災であり、事故ではなく事件であるということを記憶しなければなりません。そして、このような悲劇を二度と起こさないよう、私たちは継承しないようになります。

濟州島の4・3事件の発端も記憶しています。

3・1運動のデモ行進からの解散の際、こちらを襲撃してくると警戒した米兵が民衆を発砲し負傷したのが発端です。積極的平和的解決への歩みを無視し、対話をせず武装化した結果、人に対する不信感が生まれ武力行使に至った悲劇であると考えます。3・1運動の発砲の抗議運動は警察や、北部朝鮮の政府動向に憎悪を持ち組織するようになった「西北青年隊」によって暴力的に鎮圧され、民衆が米軍の意向に従わない濟州島を

「アカの島」と米軍が呼称するようになりました。米軍政や西北青年隊によって虐殺は続き、その結果米軍政に憎悪をたぎらせた濟州の民衆の一部の人達が武装組織を作り、政府関係者やそれに関わる人を殺害、更には誤解によって殺された人もいました。濟州島はこのように不信感による武装を引き金に全土で人が亡くなっていく島になったことを記憶しました。

私はこのように数々の悲劇の歴史を濟州で学び、記憶しましたが、ただ記憶するだけではなく、私自身の考えの改めもあります。それは「行動」です。

私は濟州島に行く前も確かに「平和」について考えていましたが、飽和した考えで、「行動」への重要性をあまり理解していませんでした。しかしながら、「行動」し自分の意思を示さなければ私は悲劇を黙認することになり、また戦争のない社会を作るものから遠ざかるものだと考えました。「どうせ変わらない」と考え続けた末路は望まない世界を私たちが作ってしまい、自らの命が危険にさらされることになるでしょう。

理想論的で地道なものでしょうが、私は他人の命や尊厳を殺めることをしたくないので、積極的な平和的行動をします。

過去の過ちを再び繰り返すことなく、平和な社会であり続けるために私は自分なりに意思を表明したり色んな人へ継承したりして、「行動」することを心がけようと考えたのが今回のユースフォーラムでした。大変有意義な時間で、私にとってかけがえのない学びが得られたと考えています。

●大和 泰彦●

2022年から3回続けて参加することが出来ました。今回は濟州4・3と現在も続く「国家による暴力」が大きなテーマとなり、様々な思いを胸に参加した皆様と共に現場を歩き、共にアクションを起こすことが出来て本当に実りの多い時と

なりました。4・3平和記念館や虐殺の跡地、江汀村の風景などを見ながら、耽羅国に始まり朝鮮王朝に取り込まれ、日本の植民地支配と解放から現在へと続く濟州島の苦難に満ちた歴史とそこ

に暮らしてきた人々について常に考えていました。

特に今回のフォーラムでは毎晩のように参加者同士で1つのテーマについて話し合い、共有する時間が十分に持てたことは相互理解が深まり非常に良かったと思います。座学とフィールドワークに留まらず、体を動かして考えるようなプログラムも私にとっては新鮮なものとなりました。旅の直前に私が猛暑と多忙のため大きく調子を崩してしまい、前半はバテ気味だったことは申し訳なく思っております。

プログラムを最後まで有意義な内容にするべく企画・実行して下さった韓国側実行委員の皆様深く感謝申し上げます。1つだけ、全体を通して心もとないと感じた点を挙げるとすれば、今年はLINE上のやり取りが多く、ハンドブックが配布されなかったことで、予定が直前まで不明確な場面もありました。当日に細かな変更が生じるのは致し方ないですが、大まかな予定を把握するた

めに、また手元に記録を残すためにもやはり紙の資料はあった方が良かったと思います。

日本に戻り再び日常がやって来ましたが、国家を動かす者たちによる聞いて呆れるような言動が連日のように繰り返され、最近では挙げればきりが無いほど歯止めがかからなくなっており、今回のテーマである「国家による暴力」が公然とまかり通っている現実を改めて痛感させられます。自分1人では非常に微力ですが、旅で見たこと、聞いたこと、体験したことをそれぞれの持ち場で広めて還元し、宣言文にも書かれたように冷笑せず、「新たな戦前」といわれる今の世界に対して厳しく抗う姿勢を示す必要があるように思います。

この平和フォーラムは今年でいったん終了ということですが、参加された日韓の皆様と情報交換し、何らかの形で続けていけたら嬉しく思います。日本と韓国に留まらず、東アジアの市民全体で現実を直視し、平和を実現するべく広い輪を形成していくことを願っております。

●大倉 桃香——●

私は今年のフォーラムでも多くの学びを得ることができました。

特にセウォル号事件の記憶館に行ったことが印象的でした。セウォル号事件は2014年4月16日、韓国・仁川港から済州島へ向かっていた大型旅客船「セウォル」転覆・沈没し、セウォルに乗っていた修学旅行中の高校生を多く含む299人が亡くなりました。事件当時、私は12歳でした。大きな衝撃を受けたことは覚えています。他人事でした。しかし、今回のプログラム参加前にドキュメンタリーを見たことで、遺族や周囲の人々の想いを共有することができました。そして、記憶館ではこの事件の裏側、助けられたはずの命が失われた背景に触れました。それは、国家が見捨てたということです。通報により、乗員の「助けて」という声が届けられていたにもかかわらず、国家は動かなかったのです。

私はこの日韓青年フォーラムのプログラムに3年間、参加させていただきました。1年目は韓国にて水曜デモの参加や戦争と女性の人権博物館に行き、日本軍による慰安婦問題について学びました。2年目は、関東大震災の際に起きた朝鮮人虐殺について学びました。この3年間を通して、日韓の間には様々な出来事があることを理解しました。昨年までは、日本が一方的に起こした事件ばかりなのかと思っていましたが、今年済州と沖縄には共に米軍基地の問題を抱えていることを知りました。

私は今年、卒業論文として「日韓の歴史から見る今日の関係性」について論じる予定です。この3年間のプログラムを通して学び、得た知識を用いて、自身でさらに学びを深め、今後のより良い2カ国関係を築いていくヒントを導き出したいと考えています。

●杉本 莉里子——●

私がこのプログラムに参加した動機は日韓関係が良くなればいいなというぼんやりとした好奇心で、他の参加者のように活動していたりというような立派な動機ではなかった。第一回のzoomの顔合わせでは他の参加者が身体を張って活動していることを知り、困惑したこともあった。しかし、無知な私だからこそ新しく知ることや吸収するものが沢山あり、実りのある5日間にすることができた。そこで、あえて学んだことを二つ挙げるとしたら、「関心を持ち続けることの必要性とつらさ」と「話を聞くことの大切さと残酷さ」である。

一つ目の、関心を持ち続けることの必要性と辛さについて、私は、済州島に行く前には4・3事件そのものを知らなかった。赤ちゃんからお年寄りまで、政府の欲望を満たすために殺すという手段しかなかった悲劇。日本に限らず、世界中にこのような事実を知らない人が沢山いるのが現実だと思う。私はフォーラムを通して沢山の人の話を聞くことで、事件について知るだけでなく、この記憶を忘れられないものにすることができた。

●濱名 佳純——●

まず初めに、このプログラムに関わってくださったすべての方々に心からの意を示したい。今回、初めての参加で期待と不安を持ちながらの参加であった。先月、行なわれた大学の交流プログラムで悔いが残ったままの参加となり、このフォーラムも同じような結果になってしまったらどうしようという不安が大きかった。しかし、韓国人の方を中心として社会問題に積極的に関心を持ち、行動している方々と関わる機会を頂けてとても充実したものとなった。

このフォーラムを通して印象に残っていることは、学び続けること、継続的なケアの必要性である。私はカンチョン村への訪問で人生初めての

しかし同時に、関心を持つことで悲惨な現実に向き合うつらさも感じた。このつらさに立ち向かう勇気を持ち続け、絶えず関心を持つことが必要なのだと身をもって感じた。

二つ目の、話を聞くことの大切さと残酷さについて。やはり、当時の悲惨さを知るには当事者の方々に直接話を伺うことが必要だと感じた。しかし、それは同時に、悩みや痛みを抱えている人にもう一度当時の悲劇を思い起こさせることになる。このジレンマは済州島の歴史だけでなく、様々な歴史を伝えていくうえで解消されることはなく、自分の中で折り合いをつけることもできない問題だと感じている。

私は今大学で国家予算について勉強している。この学問は国家暴力に直接繋がるものであり、学生の間にこのフォーラムに参加し、国家暴力について学ぶことができたことはかけがえのない財産になると考える。今後、自分がどのような仕事に就いたとしても、このフォーラムを忘れることなく、追悼の意をもって真摯に自分ができることを全うできればと思う。

デモに参加した。正直、デモの最中は恐怖があった。基地からは軍の人たちがこちらをじっと見ているという状況であった。皆が楽しそうにデモのダンスをしているときも心は穏やかではなかった。しかし、この状況を客観的に見つめた時に、私自身の学びが足りなかったから不安になっているだけではないのかと考えた。自分の意見や立ち位置をしっかりとさせるためにも学ぶことは重要であると同時に、今現在も正しい正義のために戦っている人々に対して自分ができることの一つである。

次に、私がこのプログラムの中で特に興味を持っていたセウォル号記憶館への訪問である。想像

以上にこの事件が多くの人々を今も苦しめている。遺族だけではなく、救命にあたった方々、セウォル号事件を目にしたすべての人々であった。救命にあたった方の話を聞いたときは涙が止まらなかった。この事件に対して、批判的な意見を発する人も少なくなく、セウォル号事件はまだ続いている。この事件だけでなく、悲しみや苦しみを抱えているすべての人々に対して社会全体が継続的なケアを行なえるように社会が変わっていく必要があるのではないだろうか。

●五十嵐 望美——●

2024 日韓ユース平和フォーラムへの参加は、前回参加した 2022 年のフォーラムに続き、さらに私にとって大きなきっかけをもたらす貴重な経験になりました。2022 年の第 1 回目での出会いから 3 年間にわたって日韓交流と互いの平和と和解をめぐる歴史的記憶と活動共有を行なって来た中で、この 3 年で得ることのできた繋がりや学びは決して小さいものではなかったと再確認することができました。

また、今回は韓国・済州島に渡って「国家暴力」をテーマに集まって過ごす時間を通して、済州が経験してきた大きな暴力と人々の痛みと向き合う中にも、そこには希望があったことを知ることができました（4・3 事件でいえば建国を目指して運動していた人々が作った憲法草案で描いていた国家の形、セウォルで亡くなった高校生たちの将来など）。その歴史や記憶を知れば知るほど、「記憶すること」の意味についてもより深く考えることができたと思います。

そして、第一回目の時は日本と韓国とのギャップ（韓国では活動が盛んなのに比べて日本では活動が乏しいこと、そこから日韓間での交流の壁）を感じざるを得ない側面がありましたが、それか

このプログラム全体を通して、過去の悲しみや怒りに触れ、人々の温かさに触れる機会もいただいた。個人的には、韓国で活動家として活動している方々と意見交換が出来たことは、韓国の実態を肌で感じる良い機会になった。また、韓国の社会問題に立ち向かっている姿を見て、私も少しずつでも挑戦していこうと前向きに思うことが出来た。今回、この機会が与えられたことに心から感謝したい。

ら出合いを重ねる中でわたしたちはそのギャップを乗り越えようと努力してきた、そしてこうしてギャップを乗り越えて来たその成果や力強さを今回のフォーラムで一番感じることができました（今回参加した新たなメンバーでもそのギャップを感じた人もいるとは思いますが）。

そのことを最も表現できたのが、江汀村での抗議行動だったと思います。あれほど希望や連帯の力強さを感じた時間はありませんでした。第一回目で恐る恐るの中、水曜デモの現場で初めて連帯スピーチをした時のことを振り返ると、今回おそらく（？）みんなが笑顔となって、わたしたちは諦めないという想いの力強さを海軍基地の前でぶつけて思いっきり表現することができた場面は、本当に感動的な経験でした。

また、フォーラムが終わってからも情報共有が続いたり、フォーラムで経験したことをそれぞれの場で実践する姿も見られて、このフォーラムで得られた繋がりを決して終わらせることなく続けていこうという想いがあることも嬉しく思います。このフォーラムを通して得られた繋がりや輪を続けていき、また更に広げられるように、これからも過ごしていきたいと思っています。

●大栗 夢加——●

5 日間のフォーラムの間、私が平和学習として学んだのは現場に身を投じ、現場の声を保存することの意義だった。済州4・3やセウォル号の資料館の見学を通して、解説者の方々がこれらの出来事を現在進行形の事件である表現していた点が印象的であった。どちらの出来事も、責任の所在が明確にされていないからこそ、市民の観点によって多様な解釈が可能であった。ワークショップ等を通して、この解釈に関する議論こそ、我々が平和実現に向けて新たな価値観を見出していく上で必要とされる作業であると考えた。

また海軍基地デモへの参加や関連学習を通し、済州4・3で確認できるような国家暴力が、現代社会でも確認できる、身近な事物であることを痛

感した。海軍基地の周辺で水遊びをした際に活動家の方が、「市民の存在を見せつけることが重要」と言っていたことが印象的で、学びから自らの観点を見出すだけでなく、それを外に発信することの意義を知ることができた機会であった。

平和フォーラムでの活動は資料館での学びを、ワークショップにて共有する形で実施されていた。これによって他の参加者の知見を聞くことができた点が私にとっては大きな財産だった。特に学習した課題に対する今後の展望等を考える際には各自が持っている関連知識によって、観点が少しずつ異なっていたことが興味深く、またそれらの意見を耳にすることは自身の視野を広くさせてくれたと考える。

●柳川 朋毅——●

コロナ禍以降、数年ぶりに済州島に降り立った。韓国人のみならず、外国人にも人気の南のリゾート地。そんな華やかなイメージと裏腹に、妙な息苦しさを覚える。夏の蒸し暑さのせいではなく、この島の負の歴史をこれまで学んできたからだろう。済州島の大地を踏みしめるたびに、アンビバレントな思いが自分の中に交差する。

息をのむほど美しい海。幻想的なコッチャワルの森。生物多様性の宝庫ともいえるこれほど豊かな自然が、そして厳しくも温かい自然環境の中で育まれ、海洋貿易によって栄えてきた独自の文化がありながら、この島はその奥底に、涙も枯れるほど悲惨な痛みを有している。

多くの島民が犠牲となった済州4・3。島内の各地に残る虐殺の記憶をたどりながら、大地に流された夥しい血と、石に染み込んだ無数の嘆きの声が甦ってくるような感覚に襲われた。平和公園では、記念館の充実した展示内容以上に、追悼空間に整然と並ぶ位牌の数に言葉を失った。未だ、この悲劇的「事件」の正確な犠牲者数はおろか、

正式な評価すら定かにはなっていない。国家暴力によって刻まれたその傷は、決して過去のことでない。現在に至るまで十分に癒えていないばかりか、今もなお、さらなる暴力が繰り返されている。

それはまるで、沖縄の姿と驚くほど重なる。豊かな自然と文化を有しながら、日本のための「捨て石」とされ、島民の4人に1人が命を落としたとされる沖縄地上戦。平和の礎（いしじ）に刻まれた名前の果てしなさの一方で、80年が経とうとしている今も一向に「戦後」が訪れるどころか、とめどなく軍事要塞化していく琉球弧の島々。

カンジョン村にも、巨大な海軍基地が完成してしまった。基地の前で共に踊り歌いながら、ユネスコ憲章の前文の言葉が胸に去来する。「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」。今回の一番の収穫は、私たちが単に新たな知識を得たことではない。それぞれが様々な背景を抱えつつも、共に泣き、共に笑うことのできる仲間を得

たこと、そしてその絆を確認し合えたこと、それが何よりの宝だった。世界中に暴力と憎悪があふれ、戦争の種がまかれる中で、私たち日韓の青年

たちは、軍事基地(Base)ではなく平和の礎(Base)を共に築いていきたい。

●柳下李 詩歩——●

初参加となる今年の日韓平和ユースフォーラムでは「国家暴力」を扱いました。日本語ではあまり聞き馴染みのない言葉ですが、個人や集団に対して国家が主導する暴力を意味します。私たちは済州をフィールドに4・3事件やセウォル号沈没事故、基地建設に反対する江汀(강정)村を通して行なわれた、そして行なわれている国家暴力とそれに抗う人々の姿を目の当たりにしました。済州4・3平和公園やセウォル号記憶館で資料や記録を見ると、国家という強大なものによって市民はそのすべてをあまりにも簡単に失い得るほど小さく弱い存在であることがわかり、市民を守るはずの国家によって蹂躪された傷はとても深く跡を残します。

一方で私は済州で国家暴力の記録とともに、国家暴力によって失われたものや負った傷を回復する試みにも出会いました。フォーラムでの言葉を借りると「記憶し、記録し、行動する」ことの実践です。犠牲者や資料を記録し、出来事を憶え続けることは忘れてしまうよりも勇気と忍耐を必要とし困難な方法ですが真相究明や事実を伝え続けるために行動する人々は確実にいつか芽吹く種を蒔いているのだと思います。

私は社会において周縁化された人々にどのようなアプローチが有効であるか疑問に思い大学院で社会学を専攻しています。4・3事件やセウォル号沈没事故で見たように国家暴力という風が吹けば飛ばされてしまう小さな存在にできることはなく、それよりも国家暴力に近い側からコントロールできないかと考え、行政や司法における手段を対象にしようと思いました。しかし試行錯誤の中で現在は市民による活動へ着目しています。8月の終わりに済州で見聞きしたことはまさにそれでした。さまざまな暴力を耐え続けなければならない中で江汀での活動が実を結ぶ例を聞き、江汀や辺野古などの軍基地建設反対運動だけでなく市民による運動全体への一筋の光のように思え、無力であると思っていた市民の行動への考え方を一新することになりました。

最後に、参加者のひとりがフォーラムのはじめに「和解と平和というテーマのもとに日韓の青年が集まったことに希望を感じる」と話していました。その言葉やフォーラム中に会った人々は、市民の運動は過酷なものであると同時に希望を持ち得ることを教えてくれました。平和に繋がる希望を持って最も身近なことに目を背けずこのフォーラムで得たことを還元していきたいです。

◇2024 日韓ユース平和フォーラム声明文

私たちは日韓ユース平和フォーラム 2024 に参加するために集まりました。私たちは共感し、共に分かち合い、世代と私利私欲、構造的な問題を越えて行動するため。植民地支配と分断がなければ、悲惨な虐殺が起きなかったはずの地。欲望を規制する力が働いていたら、セウォル号も到着できたはずの地。済州へ。そこで、4・3事件という虐殺の過去、そして海軍基地を強制されている現在。これらの国家暴力の現実に触れました。

私たちは常に見えていないところでつながっているのです、お互いに立場や背景、状況に関心を持って配慮しなければなりません。時にはつながっていることを私たちが認識していなくても、それは大きな影響をもたらすことがあります。また、お互いに正義の方向性を絶えず確認し、行動することが重要です。

日本の植民地支配、米軍政の弾圧、韓国政府の暴力によって済州は長い間苦しんできましたが、抵抗してきました。特に、私たちは市民を保護しなければならない国家が、不正義の暴力で抑圧された歴史を記憶しています。

現在でも国家暴力が存在します。

市民を保護しない政府によって多くの命が犠牲になった 4・16 セウォル号惨事以降、10 年間遺族や市民たちはそれを正すために戦ってきました。

私たちは、水面に上がれなかったけど、たえなく抵抗してきた人たちを記憶し、4・3 事件とセウォル号惨事を含め、国家暴力と国家を超えて暴力に抵抗する人々と連帯して正義の道へ歩み続けます。

済州のような国家暴力を受け、抵抗している島があります。それは琉球（沖縄）です。両島は、独自の文化と歴史がありましたが、武力によって非人道的に侵略され、併合され、統治されました。

軍事力強化と軍事基地化で多くの住民が生活の基盤を失ったり、多くの生物も破壊されています。

私たちの中でも暴力は存在します。その上、誰もが抑圧されず同等に尊重され、韓国と日本の青年たちが互いに対する不安感と敵対感なく、会って対話できる社会を作ることを誓って下記のような実践を約束します。

私たちは見えないところでも互いにつながっていることを知り、お互いを繊細に気づくことができるように関心を持って配慮し、変化のために連帯していきます。

- 1-1. 私たちは社会と私たち自身に冷笑的に反応しないことを約束します。
- 1-2. 私たちは行動している人々と連帯するために SNS をフォローし、私が記憶して連帯していることを知らせる SNS 活動をしします。
- 1-3. 私たちは社会的惨事の記憶を継承し、共に解決するために黄色いリボンのような象徴物を身につけて周りにも誠実に知らせます。私たちは軍事基地化、国家暴力の歴史を学び、歴史的苦痛に共感し、これを跳び越える勇気と愛を実践します。
- 2-1. 私たちは国家暴力の被害者の声を直接聞いたり、現場に訪問したり、行動に参加します。
- 2-2. 私たちは歴史を学ぶことにとどまらず、苦痛の歴史が繰り返されないように、後代に継承していきます。現在起きている、また起こりうる多様な武力紛争を含む暴力について学び、これを阻止

し予防するために積極的に行動します。

3-1. 私たちはこのような武力紛争や暴力に関する問題意識を見つけて、私たちの周りから広めて一緒に防ぐための方法を探す努力をします。

2024 年 8 月 29 日

2024 日韓ユース平和フォーラム参加者一同

기하늘	五十嵐望美
김선화	大倉 桃香
김수민	宮本 樹
김진선	杉本莉里子
김진수	嶋田 健治
김현지	潮江 勇太
노승혁	阿波加舞弥
박준성	阿波加 寛
오혜진	来島 愛結
위정현	柳下李詩歩
이재선	大和 泰彦
이지원	大栗 夢加
이태준	李 耕 守
조영우	井上 里穂
최휘주	半田 歓喜
현나은	柳川 朋毅
이유진	濱名 佳純
양다은	UMI
최예린	柳 時 京
한희수	細井 留美



◇2024 フォーラムの事前準備会・報告会 日誌

- 第1回事前学習会 6月22日(土) 19:00~21:00/オンライン(日本側参加者の準備会)
＜第一部：学習会＞ 講師：文京洙さん(立命館大学名誉教授)
「韓国現代史における済州島4・3蜂起」
＜第二部：フォーラム準備会＞ 参加青年たちの自己紹介と、参加するにあたっての抱負
- 第2回事前学習会 7月7日(日) 19:00~21:00/オンライン(日本側参加者の準備会)
＜第一部：学習会＞ 講師：呉光現さん(「在日本済州四・三犠牲者遺族会」会長)
「在日韓国・朝鮮人にとって4・3事件」
＜第二部：フォーラム準備会＞ 2024 フォーラムのプログラムなどについて意見交換
- 日韓合同事前ミーティング 7月17日(水) 20:00~22:00/オンライン(韓国側が準備)
・自己紹介 ・簡単なプログラム案内：フォーラムの目的や日程など
- 日韓合同事前ミーティング 7月31日(水) 20:00~22:00/オンライン(韓国側が準備)
・セウォル号関連映画「誕生日」鑑賞と話し合い
- 日韓合同事前学習会 8月6日(火) 20:00~22:00/オンライン(韓国側が準備)
講師：カン・ソンヒョンさん(聖公会大学教授)「済州4・3」
.....
- 日本側参加者報告会 9月26日(木) 19:30~21:30/オンライン

◀韓日プラットフォーム 韓国ユース実行委員会▶

キム・ジンソン(日韓 PF ユースフォーラム実行委員/PEACEMOMO)
ヤン・ダウン(日韓 PF 実行委員/韓国 YMCA 全国連盟)
ユジン(日韓 PF 実行委員/日本軍性奴隷制問題解決のための正義記憶連帯)
イ・テジュン(日韓 PF 実行委員/統一人文学研究団・HK 研究員)
ハン・ヒス(日韓 PF 実行委員/韓国 YMCA 全国連盟)

◀日韓プラットフォーム 日本ユース作業部会▶

金 性 済(日韓 PF 運営委員会書記/前 日本キリスト教協議会総幹事)
藤守義光(日韓 PF 事務局員/日本キリスト教協議会総務)
柳 時 京(日韓 PF 事務局員/日本聖公会川口教会牧師)
比企敦子(日韓 PF 運営委員/日本キリスト教協議会教育部理事)
佐藤信行(日韓 PF 事務局員/外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教連絡協議会)
細井留美(日本バプテスト連盟東京北キリスト教会牧師)

◇2024 年／第 3 回 日韓ユース平和フォーラム会計報告

●収入●（単位：ウォン）

項目	金額	備考
1. 助成金	18,113,500	庭野平和財団の支援金 200 万円 ⇒両替
2. 支援金	2,566,284	日本運営委員会の支援金（日韓 PF 会員・市民の寄付金）28 万 2 千円 ⇒両替
3. 雑収入	180,000	ユース参加者の一人部屋追加料金
<合計>	20,859,784	

●支出●（単位：ウォン）

項目	金額	備考
1. 航空運賃	606,200	日本通訳者（1 人）
	968,054	韓国実務者（6 人）
2. 宿泊費	5,988,000	全参加者 41 人×4 泊
	138,520	韓国実務者の事前宿泊
	585,631	日本参加者の事前／事後宿泊
3. 交通費	1,800,000	大型バス、5 日間
	112,880	事前準備・荷物移動のタクシー代
4. 食費	3,600,550	昼食・夕食・特別晚餐など
5. 会議費	353,440	事前企画会議・ドラフト会議・評価会議・フィードバック会議
6. 会場費	420,000	アジア太平洋 YMCA 連盟・三多総合福祉館など
7. 講師謝礼	2,301,100	カン・ソンヒョン教授・ピスモモほか
8. 通訳謝礼	1,200,000	3 人×4 日
9. 雑費	206,500	グループ別行動経費、文具・薬など
<合計>	18,280,875	

*収支差額 2,578,909 ウォンは、『2024 日韓ユース平和フォーラム報告書』（日本語・韓国語版）の編集・発行費用に充てる。